

災害に強いまち・神戸 —震災30年の経験や教訓を未来につなぐ—

神戸市危機管理局

1 はじめに

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から30年を迎えました。この30年間、神戸市では、地域の皆さまと力を合わせて、災害に強いまちづくりを進めてまいりました。一方で、南海トラフ地震は今後30年以内に80%程度の確率で起こると言われており、大雨や台風などの風水害も年々激甚化・頻発化しています。これからの災害に備えて、神戸市では新たなテクノロジーを積極的に取り入れるなど災害対策のさらなる強化を進めています。

また、阪神・淡路大震災を経験していない世代が増えてきている中、震災の経験や教訓を若い世代に伝えていく取り組みも行っています。

本稿では、こうした神戸市の取り組みのうち、水道事業や防潮堤などのハード対策、ICT等を活用した新たな取り組み、さらに震災30年事業についてご紹介いたします。

2 災害時にも水を確保する 地震に強い「大容量送水管」

阪神・淡路大震災では、水道の復旧まで最大で3か月を要しました。この経験を教訓に、災害に強い水道づくりという視点から、高い耐震性能と大きな貯留機能を備えた「大容量送水管」を整備しました。市街地の地下深くを全長12.8kmにわたって走る直径2.4mの「送水管」であり、震災後20年の歳月をかけて完成しました。

平常時は、既存の送水トンネルとともに、琵琶湖・淀川を水源とした水道水を市内に送水しており、大規模な地震などで水



大容量送水管（写真は断層横断部の使用管）



大容量送水管のイメージ図

道施設が破損したときには、市民約150万人が12日間使用する分の水（1人1日3リットル換算）を確保し、さらに他の貯水施設とあわせると26日間分を確保できるようにしています。送水管上に整備した6か所の「立坑」を給水拠点として、貯留された水を応急給水や消火用水に使用することができ、災害時においても市民生活の維持に貢献することができます。

3 1000年に1度の津波から人とまちを守る防潮堤

南海トラフ地震で想定される津波への対策として、神戸市では、1,000年に1度の大規模な地震による津波（レベル2）を想定した対策を2023年3月に完了しました。レベル2では例えば神戸市中央区では最大3.9mの津波が想定されますが、防潮堤のかさ上げや補強などを進め、人の住む区域には浸水しないと想定されるレベルにまで対策しています。また、防潮鉄扉の開閉はタブレット端末で遠隔操作も可能です。



メリケンパーク入口の防潮堤

4 外部給電・神戸モデル

阪神・淡路大震災では、大規模な停電が発生し、避難所内での電力の確保が課題になりました。また、近年地震や台風などの自然災害による停電が頻発しており、被災者の生活に多大な影響を与えています。そこで、避難所の照明に電力を供給できる

「外部給電・神戸モデル」を、避難所に指定されている市立小・中学校、高等学校約240校に導入しました。

災害停電時には、機動力があり給電できる「電動車」などを使い、避難所内（体育館、職員室、多目的室など）の一部の照明を3～4日分供給することができます。電池残量が少なくなった電動車は、ごみ焼却による自立発電が可能な港島クリーンセンター（港島CC）を活用することで、反復して避難所などに電気を供給することができます。



外部給電・神戸モデルと給電サイクルのイメージ

5 災害情報を集約したポータルサイト「リアルタイム防災情報」

最新の防災情報（警報・注意報、地震・津波に関する情報、避難情報、避難所情報等）を一か所にまとめて分かりやすく提供するポータルサイト「神戸市リアルタイム防災情報」を提供しています。天気情報や、交通機関・道路情報などの便利なリンク集も掲載していますので、「神戸市リアルタイム防災情報」で検索し、災害時はもちろん、普段からご活用いただけます。



リアルタイム防災

6 全国で初めて導入 「帰宅困難者支援システム」

東日本大震災発生時に首都圏では、公共交通機関の運行停止により、自宅に帰れず駅などに多くの人が滞留する「帰宅困難者」が大きな問題になりました。神戸市では、2024年に全国で初めて「帰宅困難者支援システム」を導入しました。広域災害時に多くの帰宅困難者が発生した場合、WEB上で提供されるこのシステムにスマートフォンなどでアクセスし、要配慮事項の有無など簡単な情報入力を行うことにより、条件に応じて自動で一時滞在施設を割り振り、迅速に一時滞在施設へ案内します。



スマートフォンを使って簡単に申し込みができる帰宅困難者支援システム

7 LINEを使った市民同士の災害 情報共有「神戸市災害掲示板」

市民同士による災害情報共有のプラットフォームとして、LINEを活用した「神戸市災害掲示板」を運用しています。この「神戸市災害掲示板」は自然災害が発生した際などに、市民の皆さんのスマートフォンから周囲の情報を提供いただき、その情報を地図などに整理・集約し、WEB上で共有するものです。災害時における地域の様々な情報をリアルタイムで確認することができるので、災害対応に役立てていただくことができます。



LINE「神戸市災害掲示板」

8 震災を知らない世代が 未来へつなぐ

阪神・淡路大震災を経験していない市民が増えてきている中、若い世代に震災の経験や教訓を伝えていく取り組みも行っています。その一つが、公募で集まった10代・20代の実行委員が企画・運営する震災30年市民フォーラム「RE KOBE：震災を知らない私たちが未来へつなぐ」の開催です。2025年3月8日（土）に神戸朝日ホールで開催したこの市民フォーラムでは、若者たちの目線で、震災の経験・教訓を未来へ継承していくとともに災害への備えについて学び考える多様なプログラムを実施し、約400人の幅広い世代の方に参加いただきました。



市民フォーラム当日の様子

9 進化した防災テクノロジーに 触れ、学び、体験する

震災30年事業の一環として、震災の記憶や教訓を未来へ継承し、世代を超えて防災・減災の重要性を共有するため、市民向け防災イベント「レジリエンスセッション 震災と未来のこうべ博」も2025年4月26日（土）・27日（日）に開催します。本イベントでは、デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）、みなとのもり公園、新港第1突堤西側、メリケンパークの4会

場を舞台に、産学官連携により、防災・減災の取り組みや最先端テクノロジーに触れ、学び、体験できる機会を創出します。



10 「グローバル貢献都市」 を目指す神戸市

2025年4月28日（月）に、神戸ポートピアホテルで「グローバルカンファレンス」を開催します。震災30年の節目の年に海外の主要都市を招聘し、様々な災害への備え・対応・レジリエンス、気候変動対策などをテーマに意見交換を行い、その成果を国内外に発信します。



神戸市震災30年事業ロゴマーク

11 おわりに

近い将来起こると言われている南海トラフ地震はもちろん、いつどこでどのような災害が起きるか予測ができない中、地域の安全は、自助、共助、公助の3つが連携して守っていかねばなりません。神戸市は、住民一人ひとりがあらためて災害を自分ごとと捉え、イザという時のためにも地域での繋がりを深め、防災活動に取り組んでいただけのように、これからも地域住民の皆様とともに取り組んでまいります。